

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに
捧げた。メロスはまごついた。佳き友は
気をきかせて教えてやった。メロス、君
はまっばだかじゃないか。早くそのマン
トを着るがいい。この可愛い娘さん
は、メロスの裸体を皆に見られるの
が、たまらなく口惜しいのだ。
勇者はひどく赤面した。

(太宰治「走れメロス」)

